2019（令和元）年11月13日（水）　京都新聞（夕刊）3面

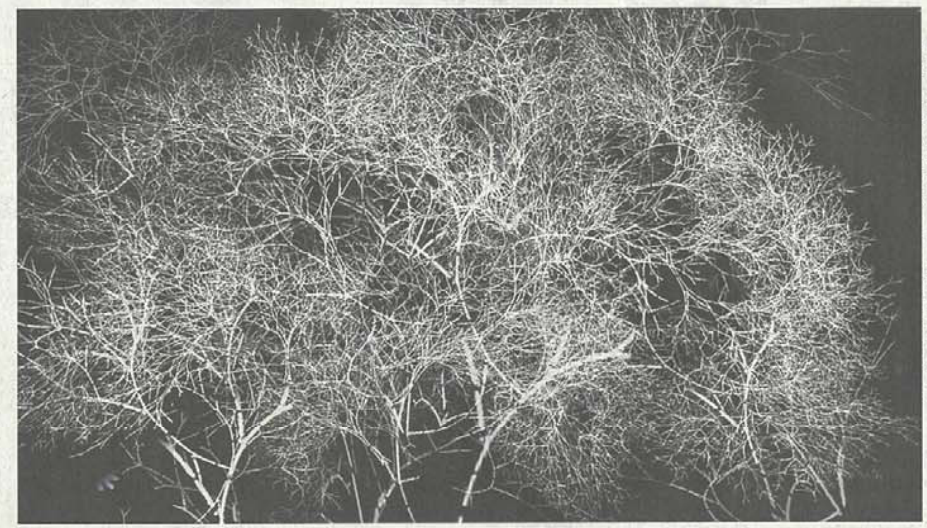
CULTURE
カルチャー

上賀茂発
地球研フィールドノート

「人新世」が問う、ひと、もの、いきもの

❸ 地球史は誰が作るのか

総合地球環境学研究所・客員准教授　寺田匡宏



無限ループする映像システムとアーティストの意図の組み合わせにより作られたビデオ・アートのワン・フレーム。「樹」のような存在が出来するが、この現象を作り出す主体は人か、それとも…

ロヒニ・デバシャー作「Arboreal」（静止画）、シングルチャンネル・ビデオ、16分29秒、2011年、©Rohini Devasher、Courtesy Project 88、Mumbai

今年は平成から令和に改元が行われたが、もうひとつの「改元」が地球規模で近々行われるかもしれない。今次の改元は30年規模だったが、こちらの「改元」は、約1万年規模である。46億年という地球史の中に、新たに「人新世」という地球史の年代区分を設けるべきだという議論が提起されているのである。

地質学的「改元」提唱

私たちが存在する今は、岩石や化石を基準にした地質学的な地球史の年代区分でいうと、新生代の中の第四紀の中の完新世である。これは約1万年前に始まった。地質学では地層を基にした年代区分を設けており、完新世以外にも、ある程度の大きさの生物が見られ始める顕生代、恐竜が繁栄した中生代、哺乳類が出現した新生代など、さまざまな時代の呼び名がある。そこに「完新世を終了させ、新たに『人新世』とするべきである」という提案が2000年ごろ、もたらされた。提唱者はノーベル賞受賞者の大気化学者パウル・クルッツェン博士。国際地層委員会の分科会がその可否を真剣に議論している。

人新世という語は日本でも少しずつ聞かれるようになっており、新海誠監督の映画「天気の子」も言及している。原語ではアンソロポシーン（Anthropocene）という。アンソロポス（人類）とシーン（新）というギリシア語を組み合わせた造語である。地球温暖化や生物多様性の減少、海洋酸性化など人間由来の地球への負の影響が無視できなくなっているが、これらは18世紀の産業革命期に始まるとされ、20世紀に激化した。このことを地球史的に位置付け、危機感を共有するために、あえて地質学の語を用い、人新世という区分を設けるべきだというのである。

人新世の開始点や指標を何とするかは諸説があり、地質学的にマイクロプラスチックや二酸化炭素、放射性物質の地層への含有量で特徴付けられるようになるのではないかという議論もある。自然科学的議論だけでなく、その考え方や意味を巡る人文学的な議論も起こっている。これまでになかったタイプの新たな議論で、それに特化した韓国の科学技術院人新世研究センターなどの研究機関も出てきた。

「なる」概念で歴史見る

人新世のユニークなところは、人間の歴史を、人間史を超えた過去に接続させようとする点である。歴史は一般に人間の問題と考えられる。一方、地球の過去の大半は物理進化、化学進化、生物進化と呼ばれるプロセスである。仮に18世紀以降を人新世と呼ぶとき、人間の歴史が、ものやいきものの過去とダイレクトにつながることになる。これまでの歴史は、そのような過去を扱ったことがなかった。

そのような歴史をどう語るか。筆者は「なる」という概念がそのカギになるのではないかと思う。政治思想史の丸山眞男が見いだした歴史原理だ。「なる」とは「成る」であり、英語でいうビカムである。これは「古事記」に見られる歴史の見方で、歴史を人間が作りあげたものと見るのではなく、ものや現象の自然な出来（しゅったい）と同じと見る立場だ。自然な「なりゆき」という語もあるように、この「なる」という考え方には歴史における人間の主体性を封じ込めるという面もある。だが、人間と人間以外のいきものやものをともに、歴史の主体としてとらえることを可能にする面も持つ。

歴史を考えるとき、意思を持つ人間の主体性が問題にされてきた。だが、実際は歴史の中には人間以外にも、いきものも、ものも存在したはずだし、そもそも人間もいきものであり、ある意味で、ものでもある。そうなると、人間の主体性とは何か、歴史に人間以外がどうかかわるのか、あるいは、歴史とは何かが改めて問われる。

人間の主体性を踏まえた上で、ひと、もの、いきものを地球史の中にどう位置付けるか。人新世の提唱とは人間の歴史を、人間を超えた過去に接続することで、人間とものやいきものの関係を巨視的に問い直す試みである。＝第2水曜に掲載します

てらだ・まさひろ　人文地球環境学、歴史学。国立歴史民俗博物館研究員、独マックスプランク科学史研究所客員研究員などを歴任。著書に「人は火山に何を見るのか」「カタストロフと時間」ほか。

※京都新聞社の許可を得て掲載しています